

対象類型

革新的サービス

業 種

食料品製造業

事業計画名

## 地元特産品を使った和洋新商品開発と 設備導入による商品開発力・品質・生産性の向上

### 広戸菓子舗



生地を均等に伸ばす熟練職人の作業もこなす「生地自動絞り出し機」



短時間で高品質の焼き上がりを可能にした「スチームラックオーブン」



しっとり美味しい焼き上がり



人気の『セメント饅頭』と『22才の別れ』

別府市内のカフェでも楽しめる  
キャラメルキューブクーヘン」



廣戸 和彦 代表



profile  
企業情報

会社名 広戸菓子舗  
代表者 代表 廣戸 和彦  
所在地 〒879-2412 大分県津久見市高洲町8番9号  
TEL/FAX.0972-82-3897  
URL <http://www.hiroto-kasiten.com/>  
事業内容 和洋菓子製造・販売  
創業 1965年  
社員数 2名



background  
背景・経緯

#### 競合が激化するスイーツ市場で、独自性を発揮した商品づくり

その昔は贅沢品と言われていた和洋菓子だが、今では身近な嗜好品として親しまれ、スイーツブームの到来により、購入者自身が食する消費品だけでなく、贈答品や手みやげ品としても利用されるようになってきている。その一方で大手コンビニやカフェチェーン等によるオリジナルスイーツが台頭してきた影響もあり、地方の和洋菓子店はいかに独自性を持った商品を開発するかが大きなテーマとなっている。

津久見市の広戸菓子舗は、チーズケーキの名店として広く知られている。もともと和菓子店として廣戸秀吉氏が1965年に創業したが、現在は洋菓子の本場・ドイツや京都の洋菓子店で修業を積んできた2代目の廣戸和彦氏と共に、パティシエの資格を持つ娘とともに親子三代で店に立っている。

商品開発にも熱心で、津久見らしさを出した意外性のある和菓子『セメント饅頭』や、津久見出身のシンガーソングライター・伊勢正三氏の名曲にちなんだ焼き菓子『22才の別れ』、夏季限定の『葛ゼリーキャンディー』等々、店頭には多彩なオリジナルスイーツが並んでいる。残念ながら2017年9月の台風18号により一時営業を中断せざるを得なかったが、見事に復活したのは同店のファンが多かったことの証しでもある。

広戸菓子舗がものづくり補助金で新規設備を導入したのは、その前年。この時に導入した設備も、同店の復活に一役買ったともいえる。



details  
事業内容

#### 生産性の向上と商品開発の道筋を拓く

本事業では、「生地自動絞り出し機」を導入した。シート状（ロールケーキ、バームクーヘン等）、スティック状（エクレア、スティックケーキ等）、ボール状（シュークリーム、マカロン等）といった様々な形状の絞り出しが可能で、生地の種類や当日の気温に合わせた絞り出しスピードもパネル操作で微調整できるという装置だ。

「スチームラックオーブン」も同時に設置した。従来の設備より気密性が高く、高压加熱が可能な構造になっており、高品質で大量の菓子を短時間で焼き上げることを可能にした。

本事業により、かねてからの構想だった『セメント饅頭』等の新商品の開発に至った。



achievement  
成果

#### 高付加価値商品の開発意欲をかきたてる

新規導入した2機種は、想定以上の働きを見せた。

「生地自動絞り出し機」は、バームクーヘンのような層状に焼き上げる菓子の製造に真価を発揮する。生地を変えることで色の層を作ることもでき、さらにセンサーで厚さを感知するため輪切りカボスのような固形材料を合間に挟んで層を仕上げることも可能。また、熟練職人でなければ不可能だった生地を均等に伸ばす作業も自動制御され、従来は180秒を要していた作業効率も10秒まで短縮化され、スタッフの作業負担を大幅に削減できた。

新設の「スチームラックオーブン」は天板が4枚から10枚に増えたおかげで、短時間の焼き上がりを可能にした。また、柑橘類の香りを長時間のスチーム加熱で維持できるため、新商品『ふくさラスク』の開発に寄与。加えて、内外を同時に短時間で加熱できる点は、新商品『求肥入りプリン』の開発にも貢献した。



future  
展望

#### 地方の和洋菓子店ならではの新品を

新設備の導入は作業効率の向上と生産量の増大だけでなく、新商品開発に対する可能性を広げ、スタッフのモチベーションも高めた。

実際のところ、導入前後から手がけていた『セメント饅頭』はロングセラー商品として安定した人気を誇るようになり、同店の知名度も高めた。最近では、親子三世代の菓子職人が提案する多彩な新商品を楽しみに店を訪れる客も多いという。

新規参入が続き、競合が増える一方のスイーツ市場。「地元ならではの素材を活かしながら差別化を図り、販路拡大につなげていきたい」と、廣戸代表は意気込む。

Point

本事業の実施によりモチベーションが高まり、  
製造環境の充実から生まれた余力を  
地域の特性を活かした新商品開発に投入。